

虐待とネグレクトは、心理的な問題だけではなく、社会的な要因などさまざまに含む複雑な問題である。それを包括的に1冊にまとめたのが、R・M・リース編『虐待された子どもへの治療—精神保健、医療、法的対応から支援まで』（明石書店、郭麗月訳、2005）である。600頁に迫る大著で専門家は必携。

長じて虐待などの被害者がトラウマの問題を抱えることは少なくない。J・G・アレン著『トラウマへの対処—トラウマを受けた人の自己理解のための手引き』（誠信書房、一丸藤太郎訳、2005）は、実践的なトラウマ治療の本。著者はメンガー・クリニックのシニア・スタッフで、個人、集団、家族の各心理療法や薬物療法、入院治療などについて体系的にまとめている。本国でも評価が高く、第二版が出されたという。

S・ヘス＝バイバー『誰が摂食障害をつくるのか—女性の身体イメージとからだビジネス』（新曜社、宇田川拓雄訳、2005）は、摂食障害発症の社会学の本。摂食障害の患者と文明化は比例的な関係にある

との指摘は、以前より下坂幸三氏などの精神科医師らによってされている。さらに進んだ文明化はダイエット産業を生み出すようになり、瘦身の価値観がグローバルゼーションの一つとして全世界的に広がっているという。「軽い」摂食障害が増え、飽食と絶食が奇妙な同居をしている現代の事情がよくわかる。

氏原寛著『ロールシャッハ・テストとTATの解釈読本—臨床的理解を深めるために』（培風館、2005）は、タイトル通りのまっすぐな本である。やり方を一通り覚えた後に読むと、理解できることが多い。また事例も掲載されているので、グループ学習などにも役立てられるだろう。またTATについて詳しく書かれた本は、あまり類書が多くないので、ぜひ揃えておきたい1冊である。

M・レーガン著『[[ビレッジから学ぶ] リカバリーへの道』（金剛出版、前田ケイ監訳、2005）は、統合失調症などの精神科リハビリ、コミュニティ・ケアの実践読本。ビレッジとは、精神保健福祉サービスの統合的ケアモデルのパイオニア的団体。